



折々のことば

鷲田 清一 2653

「このへん」だけ考えていれば、仕事ができる／できないという社会一般の基準は、子どもはなくなり、昨日と、一週前と比べてどうかしか気にならなくなると、広島県で「町のよさ」を「のよさ」な書店を営む主は言う。店員が気持ちよく働け、地域の「とまり木」みたいな店になればいい。島田潤一郎との共著『本屋で待つ』から。

2023・2・22

売上を伸ばすという意味で会社を大きくするよりも、会社がよりよくなるって「このへん」のほうが何倍もいい。

佐藤友則

お元気ですか。連休があげました。子どもたちは元気に通学しているでしょうか。学校生活を楽しんでいるでしょうか。

『折々のことば』を読んで、学校がよりよくなるということはどういうことかと考えました。

何といっても「明日も行きたい」という場所になってほしい。競争させられ 校則にしばられ...という現状の中でも、喜びや成長を感じられる場所になってほしい。仲間と居る楽しさを実感できる場になってほしい。

そのために自分は学校の一職員として何が出来るか。保健室はどうあればよいか。考え続けていきたいですね。

学校の「とまり木」みたいになれたらいいな。

2023.5.10 朝日新聞

私の視点



金沢こども医療福祉センター 療育園施設長 (小児科医)

うえの よしき 上野 良樹

昨年12月14日付本紙に掲載された「発達障害」の子8.8%、4割は支援受けず」という文部科学省の調査結果は、社会に衝撃を与えた。支援の拡充が急務だが、その際には、今6割が受けているとされる支援の質も問われなければならない。一口に発達障害と言っても、子どもたちの抱える困難は多様である。それぞれ異なる支援が求められるが、他方で、診断名の違いを超えて共通する重要なポイントもある。子どもが置かれている環境を調整していく、という視点だ。

支援方法の一つであるペアレントトレーニングについて、私自身が小児科外来で個別のトレーニングを行っている経験から述べてみたい。

ペアレントトレーニングは、子どもの行動変容を促進するプログラムである。親などの保護者を対象にし、診断がなくても支援を進められることが特徴だ。子どもの行動への肯定的理解を深め、不適切な行動への対応法を学んだりしながら、子どもの置かれる環境を調整していく。重要なのは、子どもを適切な行動へ導く対応だ。トレーニングでは、「子どもにしてほしい行動」を一緒に考えていく。例えば授業中に立ち歩くと、「立ち歩かないこと」を行動目標とするのではなく、「立ち上がりたくなったら先生にその気持ちを伝えること」を求めるだけでも、子どもの環境は変わる。

発達障害の子の支援

環境整え 適切な行動導く

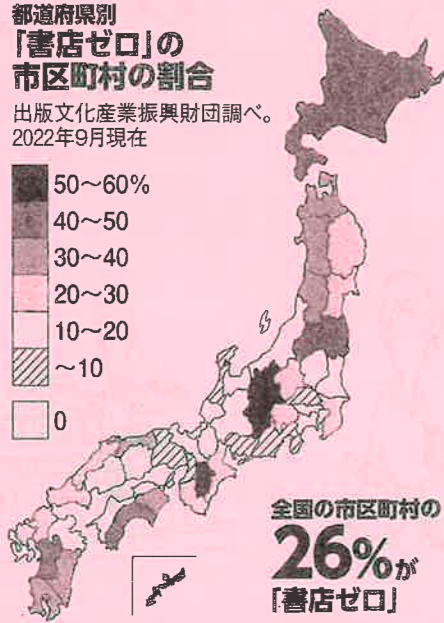
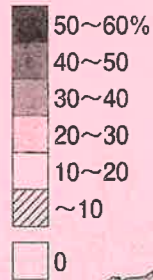
伝え方も一緒に考え、「筆箱を挙げる」か「下敷きを挙げる」かといった選択肢を示し、選べたら「一緒に練習してみよう」とシミュレーションもする。そして、もし立ち歩きたくなったらどうするかを言葉にさせながら、学校にもお願いして「まだ挙げなくていいかな」の声かけや、少しでも長く座っていられたら称賛を伝え成功体験に導く。代わりの行動を指示するのではなく選ばせることは、自分で決めたという気持ちを持つためにも大切である。

どんな行動にも理由があり、子どもの行動は環境によって大きく左右される。「うまくできないこと」があっても、環境を調整することで問題が解消されることはありうる。うまくできないこと、人と違うことが障害であるわけではない。

ペアレントトレーニングを含む早期支援の大事な目的の一つは、子どもたちが不適切な関わりのために自己評価を下げ、さらに社会的不適応や家庭での子育て不全といった「二次的な障害」が起きることを防ぐことである。これはすべての発達障害に通ずる。子どもたちに関わる全ての職種の人たちによって、必要な支援のありかたが模索され、確立されていくことを願う。

都道府県別「書店ゼロ」の市区町村の割合

出版文化産業振興財団調べ。2022年9月現在



全国の市区町村の26%が「書店ゼロ」

朝日新聞 2023年4月3日



NHK 朝の連ドラ『らんまん』。若と竹雄の2人が好きで目が離せません。でも困ったことが... 今まで平気で抜いていた庭の草が小さな小さな花をつけていると、「よく咲いたねー」と若のように声が出て、平気で抜くことができなくなりました。抜くかその子にしようか躊躇してしまいます。

文責 阿部陽子 スマイルサポート(017-722-3749)



2017 木陰の物語

見える・見えない 日くやし涙 団士郎 著 ホンブロック

娘のことを思って、  
言ってくれている  
つもりなのだろう。



でも私はあの時、  
娘と自分のために  
必死の思いで  
離婚を決意した直後だった。



専業主婦だった私が、  
頼れる実家もなしに  
家を出て母子生活を始めていた。



それまでの私は、  
毎日娘に弁当を作り、  
ケーキ作りを教えたりするのが  
楽しみだった。



だから生活が厳しくなるのは  
分かった上でのことだった。



覚悟の決断だったが、  
それでもやはり  
現実になると辛かった。



毎日のように、  
娘を可哀想に  
思うことが起きていた。



そんな時期に、そう言われた。



事実だったから  
黙って聞くしかなかった。



そして世の中の人は、  
何も知らないで、  
こんなことを  
言うのだと思った。



被災した人たちの  
その後を思うと、  
きつと私のような思いを  
している人があちこちに  
沢山いるに違いない。



みんなに分かって貰おう  
なんていうのは、  
甘いかもしれない。



でも、私が何とも思わずに、  
娘にパン代を毎日渡していた、  
そんな風に思える  
担任の鈍感さは許せなかった。



理解されない心の傷って、  
こういうことかと思った。



あれから二十年、  
娘も成長し、  
独り立ちしていった。



でも、  
あの日の帰り道のくやし涙を  
私は絶対に忘れない。



AND.